

記念講演

第1部

演題 「中国での雪舟の足跡」

講師 許孟光（通訳 黄長江）

略歴

1949年 中国浙江省寧波市に生まれる

1976年 杭州大学中国語学部卒業

現職 寧波市文物保護管理所 副所長

寧波市文物考古研究所 副研究員

寧波市政治協商会議文化歴史委員会副主任

その他 中国博物館学会 会員

中国海外交通史研究会 会員

寧波市において、文物保護とまちの歴史文化保護に従事し、寧波の都市発展の歴史と、それに関する人物、寧波の対外関係史に関しての研究を行っている。

著書に『寧波攬勝』、また、刊行物『海交史研究』に対し、「寧波と高麗との往来と高麗史館」、「宗代明州城」、「它山・の宗代明州城発展に対する影響」などの研究を発表。

司会（城市）

ご来場の皆様、大変お待たせいたしました。それでは、只今から第8回雪舟サミット記念講演会を開会いたします。

まず、第1部といたしまして、雪舟が大内氏の支援を受け中国に渡り修行を重ねました天童寺のございます浙江省寧波市から許孟光先生を講師としてお迎えしております。許先生は1949年のお生まれで、杭州大学中国語学部を卒業され、現在は寧波市文物保護管理所の副所長としてご活躍中です。今日は、「中国での雪舟の足跡」と題してのご講演です。なお、通訳をお願いいたしますのは、寧波市外事弁公室 黄長江通訳です。

それでは、許孟光先生よろしくお願ひします。（拍手）

許孟光（寧波市文物保護管理所・副所長）

中国と日本の文化交流の歴史は長く、中国の絵画技法は、かつて日本の絵画に大きな影響を与えました。雪舟は、両国の文化使者として、中国を旅することによって自分の絵画芸術を見事に発展させ、日本の画聖になっただけでなく、寧波人民から尊敬され、しかも、寧波地方の歴史に名を残すこととなりました。私は、寧波の学者として、雪舟が晩年を過ごしたところで、学者の諸先生方と一緒に雪舟の生涯について語り合い、交流することができますことを大変光栄に思います。

1 雪舟の寧波と北京などに居る時間に関して

寧波は、唐、宋の時代から、我国の対外交通と貿易の要所として有名な港町でした。日本からの遣唐使や遣明使など、各国の使者たちの上陸地でもありました。明の時代になると中日間の貿易の秩序を確立するため、1383年(洪武16年)に勘合制度を提唱して、1409年(永楽2年)に、両国は寧波港を通じた勘合貿易に合意いたしました。その後の貿易は、大体、「永楽条約」期と「宣徳条約」期に分けられます。天与清啓を正使とする貢船は、「宣徳条約」期の第4回目の勘合船であり、景泰勘合3道(1-3号)として3隻かさなり、雪舟は、この時の貢船で寧波を訪れています。雪舟の寧波到着に関しては、1467年(成化3年)説や、1468年(成化4年)説などいろいろな節がありますが、関係する資料を分析すると、雪舟の寧波到着は1467年(成化3年)のはずであります。雪舟の寧波での友人でありました徐漣の「送別詩」の序に、「成化丁亥(3年)貢に伴ってに至る。」という文があります。また、雪舟が北京を訪れた時に知り合った高層、都の大興隆寺住職であります純拙魯庵が雪舟に贈った偈言の頭の部分に、「去歳(成化3年を指す。)から四明を遊し、天童山第一座に昇った。」という文があります。徐漣と魯庵の二人は南北の離れた地に居ながら、同じ時期を指しています。このことが、雪舟は1467年(成化3年)に寧波に到着したという証拠となっています。

雪舟と正使天与清啓は、同じ第4回目の遣明船で寧波に到着しましたが、同じ船ではなく、そのため、到着時間も違いました。雪舟は、1467(成化3年)の5月か6月の間に寧波に到着し、そして、1468年(成化4年)の6月に正使より先に北京に到着しています。

《皇明憲宗実録》によりますと、1468年(成化4年)の11月甲戌、日本の国王源義政は、遣使臣清啓らを派遣して、奉表来朝し、馬や聚扇、甲、刀、劍などのものを献上しました。そして、5月に居座寿敬に触れ、6月に通事林傑など3人と書かれているため、1468年に使臣たちが北京に到着した時間は、それぞれ5月、6月、11月であり、関係者は、居座寿敬、林傑、天与清敬などでありました。天与清敬は、1468年(成化4年)の正月に筑紫を出発し、5月に寧波に到着し、11月に北京に着きました。北京の大興隆寺住職が雪舟に贈った偈言の落款に、「大明成化戊子季夏大興隆寺住山純拙老人魯庵識」とあることから、雪舟の北京到着時間は、1468年(成化4年)の5月か6月のはずであり、居座寿敬か林傑と同じ船であったと考えられます。

雪舟は、天与清啓より約1年早く寧波に到着したため、天童寺で参禅する時間を十分持つことができ、「天童寺禅班第一座」に昇ることができました。さらに、浙江省の東部地方の名山古刹を訪問し、友人を作り、絵画を学ぶ時間もありました。また、雪舟は、北京に到着した時間も天与清啓より5~6ヵ月早かったために、正史の到来を待つ間に、明の朝廷画院を訪問して、李在、張有声などの人たちに、浙江派山水技法を学び、魯庵などの人たちと付き合う時間が十分にありました。

1468年(成化5年)5月、雪舟は、寧波から明船で帰国の途につき、その際、友人となった、寧波の徐漣や李端など人たちは、詩を贈って送別しました。

2 雪舟が寧波で付き合い合った数人の友人

雪舟は、寧波で絵画や仏学に関する豊富な知識と高潔な人格のため、現地の人々に尊重されていました。特に、親交の深かった人は、徐漣、金湜、倪光、李端などです。

徐漣に関して、この「送別詩」を後世に残した寧波人は、中国滞在中の雪舟を研究している学者たちに一番知られている人物です。“王陽明と一緒に寧王宸壕の乱を平定した徐漣”だという学者もいますが、私の調べではこれは違う人物だと思います。主な根拠の次のとおりです。第1に、出身地が違うこと。“王陽明と一緒に宸壕を叩いた徐漣”は、陝西省朝邑人であり、戸部郎中や袁州府知事などの職に就いていたことがあり、競争で功績を立てた人ですが、寧波には来たことがありません。雪舟と親交の深い徐漣は、「四明徐漣」と自称し、出身地は、浙江省東部の寧波一帯であり、あるいは、この一帯に長く住み着いていた人間のはずです。第2に、年齢の違いがあること。“王陽明と一緒に宸壕を叩いた徐漣”は、1499年（明の弘治12年）に王陽明と一緒に進士になったので、常識で考えれば、この2人の年齢は、ほぼ同じです。王陽明は、1472年（成化8年）生まれで、進士になった時は28歳であり、雪舟が中国から帰国して3年後に生まれています。こういったことから、雪舟と親しんだ徐漣は、別人であると考えています。

《 県誌》によると、 県（四明）人徐漣は、1418年（成化20年）の貢生であり、1496年（弘治9年）に県学の教官である江西会員の教諭を勤め、寺院の祭事の仕事を兼任していました。彼は、一介の文人ではありますが、生涯の間、なかなか出世ができなく、目立った業績もありませんでした。後に、 県から江西省に仕事を捜しに出かけましたが、《 県誌》では、すこし触れているだけで、詳しい記載はありません。しかし、彼の若いときの雪舟との付き合いに関する話は、後世に残されています。

金湜は、雪舟と親交の深かったもう一人の寧波人です。金湜と知り合ったきっかけは、私の調べでは、天童寺の第72代の住職無傳嗣禅師の紹介であったはずであり、趣味が同じということで親しい友人となったと考えています。

金湜は、字は本清、号は太瘦生、朽木居士の号を持ち、1441年（明の正統6年）に挙人となりました。最初の職は中書舎人、後に太仆寺の丞になり、清廉潔白な役人であり、一品服を与えられて、使節として朝鮮を訪問したことがあります。彼は、詩づくり、書道、竹の絵画が好きで、その作品は、内外の人たちから珍重されています。いつも気品の高い人間と付き合い、天童寺の常客でもありました。無傳嗣禅師との付き合いが深く、天童を歌った詩の中の文、「欲して探す開土の棲禅処」は、無傳嗣禅師を訪問することを指しています。このことから、二人の親交の深さが解ります。金湜は、倪光、李端、魏 などの人と詩社を作りました。このため、金湜を通して、詩社の社員みんなが雪舟と友人関係を結びました。

倪光は、字は應奎、 県人であり、二京を訪問したことがあり、士大夫から重んじられ、詩が上手で、「味易詩集」を出しています。日本の貢使や雪舟などが帰国する前に、饞別宴で会ったことがあります。この席上で、「日本副使梵苗公」の使を作り、贈っています。

「東渡海潮起、 筵別上人。」

(東へ渡るとき、海の潮が起こり、美味しい宴会でお上人と別れる。)

「帆開行漏尽、香逐賜衣新。」

(帆が開いて、行漏が尽き、賜れた新しい衣に香が付いていく)

「月白元無夜、花明別有春。」

(月は白く見えて、元は夜なし、花は明るく、別の春がある。)

「雲山千万里、天遺幾相親。」

(雲と山が千万里も続く、天が何時再開する機会をくれるか。)

この詩には、惜別の気持ちがいっぱい込められています。はっきりとした落款はありませんが、贈られた人は、雪舟などの人のはずです。

李端は、字は文正、号は櫟軒、博学であり、古文に優れ、性格が淡白で、利益を重く見ず、太守から農村学校の教師に任命されています。彼の詩には、唐の時代の風格がありません。《送日本使僧歸国》という詩にこういうふうに書かれています。

「鬪揚曾得知高顔、杖 肅然世外聞。」

(かつて、お寺の方丈室でお目にかかった。杖と鉢を持ちながら、肅然と俗世界を離れている。)

「己向檀林修白業、更携瓢史歷青山。」

(自分が、お寺で仏法を修行し、同時にその歴史を世間に残す。)

「肩挑雲影江頭別、衣帶天香海上還。」

(雲の下、川の埠頭で別れを告げ、衣帯の香が漂いながら、海から帰国する。)

「到日賢士如有問、八方職貢列朝班。」

(日本に着いてからあなたが聞かれたとき、中国の朝廷で世界各国からの使者が皇帝の前に並んでいると言うように。)

詩に書かれている「使僧」は、誰かは指していませんが、私の分析では雪舟のはずであり、そして、「鬪揚」は住職の寝室「方丈室」のはずであります。この詩を、「使僧」が日本に持ち帰り、詩中の文「肩挑雲影江頭別、衣帶天香海上還。」は、日本の人民にも読み伝えられました。この詩は、何時作られたかは不明ですが、雪舟を送別したときのものであると考えています。

雪舟は、北京に着いてから、礼部尚書姚 の依頼で、礼部院政庁のホールに巨大な壁画を描きました。完成後、姚尚書は大変賞賛し、詹僖に賛辞を書き加えさせました。詹僖は、雪舟が北京で知り合ったもう一人の 県人であります。詹僖について、「杭州鉄冠道人詹仲和」と落款にかいたことから、杭州人だと思える人もありますが、1560年(明の嘉清35年)に出版した「寧波府誌」には、 県人との記載があります。落款の「杭州人」には、なんらかの故があるのだろうと考えられています。

3 雪舟の寧波での足跡

雪舟は、寧波で禅の修業と絵画の勉強をするため、天童寺と寧波城の間を往来し、数ヶ

月間に渡り、浙江省東部の山や川、古寺名刹を歴訪しました。しかし、残念なことに、寧波地方誌などの書物には、彼に関する記述がなかなか見つかりません、このため、我々の研究は非常に難しく、彼の残した絵画の作品と、ごくわずかな文字の記録から調べるしかありません。また、当時の寧波海外交通史の資料、町の施設、彼と関係の深い人物の活動状況などからその糸口を探っています。

当時、雪舟一行は甬江に入り、招宝山を經由して、寧波城に到着しました。お城の東渡門外から上陸して、駅館に案内され、宿泊しました。当時、寧波城内には、駅館が2ヶ所ありました。一つは四明駅といい、この駅は月湖の柳汀島にあり、主として国内の往来役人の宿泊施設でした。もう一つは、安遠駅といい、府役所の西側、現在の中山公園の中にありました。この駅は、1406年（明の永楽4年）に設置され、中央に広いホールがあり、「賓梯」という額が掛けられ、両側には、それぞれ6つの客室があり、表には、塞門と外門がありました。浙江省東部市舶司が外国貢使を受け入れる専門の所でありました。慣例によると、雪舟は僧侶として、日本からの来貢者がよく訪れる境清寺と天寧寺に案内された可能性があります。かつて、1453年（明の景泰四年）に日本の貢船9隻が中国を訪れた時も、寧波城内の境清寺と天寧寺に宿泊しています。雪舟が天童寺と寧波城の間を往来した時も、城内での宿泊場所はこの2つのお寺だったはずであります。

天寧寺は、寧波府役所の西側にあり、元の名前は国寧寺といい、851年（唐の大中5年）に創建され、863年（咸通4年）にお寺の山門外の東西に二つの四方形の煉瓦の塔が建てられ、1382年（明の洪武15年）に天寧寺と改称された、寧波城内で最も重要な寺院の一つでありました。現在、この寺院の東の塔はすでになくなっていますが、西の塔はまだ残っており、浙江省の重要文化財に指定されています。天寧寺は、日本との歴史的な関係がとて深く、1372年（明の洪武5年）に、この寺院の高僧闡曾は、皇帝の命を受けて日本を訪問した時、日本の僧侶たちから敬われて、日本の天龍寺の住職になるようにと要請されましたが、これを固辞して、訪日の任務を全うし帰国しました。天寧寺は、また、日本の僧侶たちの宿泊施設の一つでした。雪舟の描いた「寧波府城」には、この寺院の二つの塔と、1453年（明の宣徳10年）11月に再建された高さ93尺の鐘樓がはっきりと見ることができます。

雪舟は、寧波府城にしばらく滞在した後、 県太白山の天童寺に向いました。その時、町から天童寺に行くには、主に船を利用しました。靈橋門を出て、東津浮橋を渡り、後塘街の大河埠頭（今の中山東路南側）で船に乗り、後塘河と唐の時代に架けられた大涵山橋を經由して、小白河頭、あるいは東呉で船を降り、徒歩で天童寺に行きました。彼は、禅の修業と絵画の勉強と同時に、浙江省東部の山水名刹を歴訪し、数多くの友人を作りました。金湜や徐漣などの案内により、彼の足跡は、日本との関係が深い寧波城のあちらこちらに残っています。

僧侶として、参禅は雪舟の中国訪問の主な目的の一つでした。当時、寧波城内には、天寧寺、五台開元寺、延慶寺、万寿寺、寿昌寺、天封塔、宝雲寺、湖心広福寺などの寺院が

あり、雪舟の作品《唐十勝景画稿》の「寧波府城図」からも分かるように、雪舟は、寧波城内外の古寺名刹、風光明媚な月湖、賑やかな三汀口、靈橋門などにその足跡を残しています。

寧波城の中心地にある風光明媚な月湖は、画伯の雪舟が必ず行くところでした。月湖は三日月のような形から名付けられました。1093年（北宋の元祐8年）に、地方役人の提唱により、湖底の泥で十の島が造られ、それぞれ菊花洲、月島、竹洲、竹、花、柳汀、芳草洲、芙蓉洲、煙、雪汀と名付けられ、「月湖十洲」と呼ばれました。さらに、月湖橋、偃月堤などの七橋三堤と湖心寺などの寺院と樓閣が建てられました。雪舟の描いた絵の中のアーチ形の橋は、花島にある湖心寺への湖心西橋であります。この二つの橋は、単孔の石造りで、1084年（北宋の元豊7年）に造られ、現在もまだ残っています。

雪舟は、寧波に滞在している時に、現地の文人と一緒に絵画について論議したり、また、時々には自宅に招待されたりして、関係を深めていました。記載によると、雪舟は、南門付近に住んでいた金湜の家で、《虎溪三笑図》と《商山四皓図》を鑑賞したことがあります。金湜の祖先の家は、山東錢湖の韓嶺にありましたが、後に、寧波城内に引っ越し、中古の家を買い、それを修理して住んでいました。その場所は、月湖の西岸、現在の延慶寺の西側、倉基街の一带にあり、金太仆第と呼ばれていました。

雪舟のもう一人の友人、李端は、城外に住んでいました。しかし、彼は、城内の砌街に、読書、作詞また友人と会うための「草堂」を構えており、雪舟も、この「草堂」に招かれていただろうと思われます。

雪舟は、北京に出発するとき、明の時代の慣例通り、西門（望京門）を出て、来觀亭で船に乗り、姚江を遊りました。来觀亭は、西塘川の北岸にあり、南向きで、前には「迎恩楼」、後ろには「皆山楼」がありました。北京から帰った時も、ここで船を降りています。

雪舟は、天童寺に滞在していた時に、「師古人、師造化」に名作を残し、自分の行方を後の人に残しておきました。彼の作品「阿育王山図」から、当時の名刹阿育王寺を参拝し、はっきりと記憶していたことが分かります。

阿育王寺は、天童寺から5キロの所にあり、282年（西晋太康3年）に建立され、南宋時代は天童寺とともに禅宗の天下五山の一つでした。伽藍が雄大で、中には「釈迦牟尼真身舍利」が供養され、多くの名僧を輩出しています。寺の両脇には上下二つの塔があります。上塔は、寺の東の山に、唐の時代に建てられたもので、また、下塔は、寺の西側に、713年（唐の開元元年）に建てられて、元の時代に再建されています。1992年に、阿育王寺では、雪舟の「阿育王山図」をもとに、八面七層、高さ53mの東塔が再建されました。これは、雪舟が残したものが現代に甦ったものであります。その他、寧波の学者の調べによると、雪舟の絵画「山水長巻」中に描かれている一部の山水湖沼は、天童太白山、東錢湖、雪竇山の景色だと考えられています。

1468年（成化4年）雪舟一行は、寧波を出発して、姚江と曹娥江を溯り、大運河を経由して北京に到着しました。そこで、浙江派の代表的な人物である、李在や張有声などに

絵画を学びました。後に北京を出発し、南下し、途中、天津、済南、揚州、南京、鎮江、蘇州、杭州、紹興などを観光して、多くの絵画への素材を蓄積しました。これら各地での雪舟の足跡に関しては、今後、一層の考証が必要であると考えています。

4 雪舟の禅学と絵画

雪舟は、12歳の時から宝福寺に出家し、後に、京都の相国寺などで禅を勉強し、48歳の時に、絵画の勉強と参禅のため中国に渡りました。彼の絵画での成功は、仏学関係の業績をはるかにしのぐものとなりました。

雪舟は、天童寺に入ってから絵画の勉強はもちろんのこと、仏学の研究も行い、「天童寺禅班第一座」の名誉を得ました。寺院内で、禅堂或いは念仏堂修行を指導する者は、住職のほか、東堂、西堂、後堂、主堂の四大班主（首座）が設置されて、東堂の首座は住職が兼任し、その他の首座は人望が高く、仏学の修行が深く、手本となれる和尚が担当し、禅堂の号令権を持っています。その内、西堂の首座は、主に住職を手伝い、修行の指導をします。

雪舟は、「天童寺禅班第一座」とされましたが、正しい呼び方は、「禅堂首座」ではありません。「首座」と「第一座」の違いは、寧波の人は、「一番目」の意味を持つ言葉として、「首」の代わりに「第一」という習慣があったためです。雪舟を「第一座」とした住持は、調べによると、天童寺の第72代の住持で、 県人であり、無傳嗣禅師であり、金湜と親交がとて深い人物でした。また、雪舟は、絵画だけでなく禅学関係にもかなり深い学問を持ち、天童寺の僧侶たちから尊敬されていたので、「禅堂首座」なることができたのです。

雪舟は、京都の相国寺と建長寺にいる時に、有名な画家と付き合う機会が多く、しかも、自分の天賦と勤勉により、すでに有名な「画僧」となっていました。中国に着いてからも宋と元の時代の有名な画家の作品を一生懸命探し、明の宮廷画院の馬遠、夏珪の弟子李在などの人に浙江派水墨山水の技巧を学び、そして、水墨画を高いレベルに引き上げるためには、自ら勉強する必要性を十分に認識していたため、「師は我にあり、他にあらず。」との見解を出しました。中国揚子江南北の雄大な名山大河は、彼の創作のヒントと源泉になりました。

最後に、雪舟は、自己の水墨画の特色を確立し、構図は、氣勢雄大で、咫尺千里、筆は力強く変化が多く、気魄健撥、水墨淋漓の破墨山水にも上じるし、繊細で線と色が巧みな花鳥や人仏画にも優れています。雪舟は、山水を師として、中国画の構図の特徴を吸収し、自分の持つ特徴である遠近法を確立しました。これは、日本絵画史上のひとつの改革であり、彼は、一代の宗師となり、日本画壇の「画聖」となりました。

我々は、雪舟を尊敬しています。彼が、中国の伝統文化と日本の伝統文化をうまく結び付けてできた偉大な業績を仰ぐだけでなく、中日の文化交流と両国人民の友情を深めるために果たした重要な役割を仰いでいます。

現在、寧波にある雪舟の資料は、雪泥に覆われている足跡（あしあと）のようであり、なかなか見つかりません。雪舟がかつて宿泊し、しかも「天童寺禅班第一座」に栄転した

天童寺の元の「天童寺誌」にも雪舟に関することは一片もありません。たぶん天童寺が明の時代末期に山の洪水により流出した際に、関係する資料も流出したものと思われます。このことは、雪舟の寧波ないし中国における関係史跡の研究に大きな不便を来しています。現在、一部の寧波の学者は、雪舟に関する研究をかなり進めており、雪舟の名前と事跡は寧波の新しい地方誌に載せられています。我々は、今後、日本の学者と一緒に、雪舟研究の新たな進展を見るために努力をしていきたいと考えています。(拍手)

司会(城市)

許先生どうもありがとうございました。通訳をいただきました黄先生ありがとうございました。

中国での雪舟を思い浮かべていただくことが出来ましたでしょうか。お二人にもう一度盛大な拍手をお願いします。(拍手)